

「猿に始まり狐に終わる」という言葉で知られるように、『釣狐』は狂言修業の大きな関門であり、狂言師としての技術の粋が求められる大曲です。台詞・語り・謡といった発声面、狐の物真似・アクロバット・舞といった身体面の両方に、難易度の高い口伝・秘伝の連続が見られます。1931年生まれの野村万作氏は『釣狐』に強い思いをもって取り組み、多くの狂言師が生涯に一、二度しか演じない『釣狐』を、25歳(1956年)での初演以来これまでに26回以上演じました。近年は面・装束を付けず、紋付袴姿で演じる「袴狂言」としても回数を重ねてきました。その過程で伝統を継承しながらも自らの創意工夫もとり入れ、まさに「至芸」という域に達しています。この素晴らしい芸・技を後世に伝えるべく、横浜能楽堂にて袴狂言『釣狐』を収録用に上演し、現時点で最高峰の映像技術で記録制作を行いました。なお、シテが狐の本性を現す後場を、袴狂言として演じるのは、野村万作氏にとっても初の試みでした。

### 映像記録作品の特徴

『釣狐』本編の撮影は、横浜能楽堂のさまざまな場所に設置した11台の8Kカメラによって、マルチアングルで行ないました。また普段カメラが入ることのない、舞台上や鏡の間などでの撮影も実現いたしました。通常の舞台収録では見ることのできないアングルや、8Kが可能とする高精細な映像による細部のクローズアップや音の繊細さにより、野村万作氏がまさに目の前で演じているかのような臨場感を堪能できる作品となっています。

また『至芸への道』+『装束・道具・面』においては、野村万作氏自身が解説を行っており、本編とあわせてご覧いただくことで『釣狐』に関する理解がますます深まる内容となっています。



袴狂言『釣狐』より

#### (A) 本編：袴狂言『釣狐』(約64分)

白藏主・狐 野村 万作  
 獺師 野村 萬斎  
 後見 深田 博治  
 高野 和憲  
 笛 松田 弘之  
 小鼓 鵜澤 洋太郎  
 大鼓 亀井 広忠



『至芸への道』より

撮影：2021年8月6日、19日、20日  
 場所：横浜能楽堂

#### (B) 狂言・釣狐の世界『至芸への道』+『装束・道具・面』(約55分)

撮影：2021年12月～2022年1月  
 場所：野村よいや舞台



『装束・道具・面』より

企画・制作：株式会社NTT ArtTechnology  
 撮影協力：株式会社NHKエンタープライズ

協力：万作の会、横浜能楽堂

『釣狐』によつてつるエピソードをインタビュ形式で紹介する、狂言・釣狐の世界『至芸への道』+『装束・道具・面』を併映。



袴狂言『釣狐』より

「釣狐」という、狂言の中でも特別な至難の曲を、私が初演したのは25歳の時でした。六世万蔵が「私は狐役者だ」と自負していた芸を受継ぐことに始まり、高齢になってからの袴狂言に至りつくまで、数を重ねました。46歳の時、芸術祭大賞を頂き、以後は少しずつ創意も加えながら演じてきた『釣狐』、今回、後進の狂言演者、研究者、愛好家のため、そして何より日本伝統芸能の素晴らしさを普及するために、記録撮影を思い立ちました。8Kという新しい技術のもと、NTT ArtTechnologyの御援助を得、撮影・編集スタッフのお力を借りて出来上がった『釣狐』でございます。

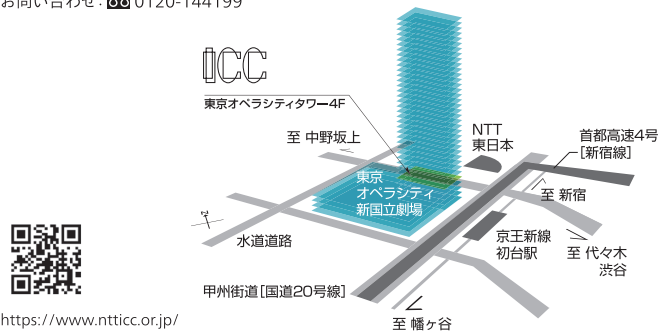
昨年文化勲章を頂戴し、このたびはその記念として、袴狂言『釣狐』本編に加え、私の芸話と、『釣狐』で使用する装束、道具、面をご紹介するインタビュー編をご覧いただけることになりました。

一人の狂言の演者が試みてきた多年の芸を、御鑑賞いただければ幸いです。

野村万作

### NTT インターコミュニケーション・センター [ICC]

〒163-1404 東京都新宿区西新宿3-20-2  
 東京オペラシティタワー4階(京王新線「初台駅」東口から徒歩2分)  
 お問い合わせ：☎ 0120-144199



<https://www.nttic.or.jp/>



NTTインターコミュニケーション・センター[ICC]は、日本の電話事業100周年(1990年)の記念事業として1997年4月19日、東京/西新宿・東京オペラシティタワーにオープンしたNTT東日本が運営する文化施設です。ICCは「コミュニケーション」というテーマを軸に科学技術と芸術文化の対話を促進し、豊かな未来社会を構想していきます。